

## OTANIING

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

亀岡グラウンドにて野球部整列



## 心を樹てる 学校長 飯山 等

6月6日は本校の初代校長・清沢満之先生が逝去された日、祥月命日です。今から118年前の1903年のことです。以来、全国ゆかり深い諸地では「臘扇忌」として法要が勤まっています。

臘扇とは先生が晩年に名告られた雅号で、「12月の扇」を意味しています。先生は40歳になる前にその激動の人生を終えられています。深甚の改革の願いも破綻し、不治の病苦の身にてご自坊の愛知県三河の西方寺で横臥の日々を送られて、終に命終されました。その思いを号に託されているのでしょう。そして最晩年、海に近い三河の西方寺に帰られての生活のなかで、「浜風」という雅号を名告られました。西方寺では、その2つの雅号を掲げた名をもって「浜風臘扇忌」として法要をお勤めされてきています。

その西方寺さんの現在ののご住職と、ご次男さんが本校を卒業されているというご縁もあって、臘扇忌法要の席のお話しの依頼を受け、今年はその日が日曜日であったこともあり、20数年前にお参りして以来のご無沙汰をお詫びする気持ちもあって、お約束しておりました。しかし、日が迫ってくるなかで、新型コロナウイルス感染症の状況が、京都府と愛知県の両方に緊急事態宣言が発令されることとなり、オンラインでの法要を決断され、私の話も事前にビデオに収録したものを配信するという形になりました。お参りは叶わなかったことですが、機会をいただいたおかげで、あらためて清沢先生のことを考える機会となりました。

1893年(文久3年)8月に生まれて、1903年(明治36年)6月にその生を終えられた39年10ヶ月の先生の生涯は、誠に激動・苦難に満ちたものでした。先生が生きられたその時代は、明治日本が西欧・近代を目標に、大きな花を咲かせよう、新たな果実を手にと邁進している時代でした。時代・国家改新の力がよく働く中に身を置かれ、その華やかさと刺激的な果実に目を奪われたような世相・人心に臨んで、先生は真正面からその時代の問題性を摘出し、自らの課題として荷負する人生を選び取られたのです。

それを象徴している清沢先生の2つの文章を見ておきます。一つは、1900年(明治33年)12月発行の、友人の近角常観氏の『信仰の余瀝』の序文のなかの、「宗教は人心をしてその根帯を自

覚せしむるものなり。信仰はすなわちその自覚なり。社会にして宗教を欠くは、その発展の一大要素を欠くなり。個人にして信仰の立たざるは、未だその根本的不明を断ぜざるなり」。そしてもう一つは、翌年1901年(明治34年)の1月に刊行された浩々洞の『精神界』創刊号の巻頭論文のなかの「吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず。もしこれなくして、世に処し、事を為さんとするは、あたかも浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするもののごとく、その転覆を免るる能はざること言を待たざるなり」の2つの文章です。前者の「根帯の自覚」、後者の「完全なる立脚地」の語が湛える激しい問題意識。殊に、根と帯の2字からなる根帯の語は、熟語の意味としては「物事のよりどころ、根拠、基礎、土台」ということですが、そこに「帯」という、私たちが見過ごしてしまう植物の部位、その有用性・活用性を考えることのない部位、しかしそのことなくして私たちが獲るところの「果」と「実」は成り立たない、そのたいせつな部位を示す字が使われていることに強い印象を受けます。このことが的確に表しているように、先生が見つめられている時代は、根帯への眼差しを亡失して、「あたかも浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするもの」となってしまう。それは、個々人の様相というに留まらないで、社会の全体を覆い尽くしているすがたでした。

その直中を生きられた先生が、自他共に確立し、開こうとされたいのちの課題は、若いとき自ら結成された学生の会を「樹心会」と名付け、後に35歳のとき東京本郷に開かれた求道学舎「浩々洞」における自ら居住の部屋を「樹心窟」と名付けられたことからもうかがい知られるように、《樹心》の一事にあると言えるでしょう。この樹心の語は、親鸞聖人がその著『教行信証』で、教えに出遇うことによって獲得された自身の大きな慶びを、「慶哉 樹心弘誓仏地流念難思法海(慶ばしき哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す)」と示された文章に拠っています。「心を樹てる」とは、樹の字が「樹木や農作物を手で立てて安定させる、うるる・たてるの意味を表す」という辞書の説明からも分かるように、いのちを大地に植えること、そして「立てる・建てる」のではない、大地から受けとるいのちのいとなみ、成育の歩み、そして大地とのいのちの交流・共感が、真っ直ぐに見据えられていることを思うのです。